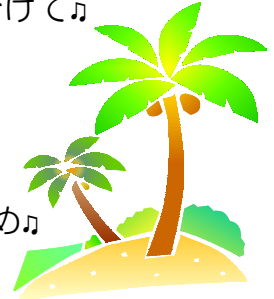




子ども番組「ひよっこりひょうたん島」の衝撃 ～番組制作者「泣くのはいやだ笑っちゃおう」の心～

♪ 波を ジャブジャブジャブジャブ かき分けて♪
♪ 雲を すいすいすいすい 追い抜いて♪
♪ ひょうたん島は どこへ行く ひょうたん島は どこへ行く♪
♪ 丸い地球の 水平線に 何かかきと 待っている♪
♪ 悲しいこともあるだろさ 苦しいこともあるだろさ♪
♪ だけどぼくらはくじけない 泣くのはいやだ笑っちゃおう 進め♪
♪ ひよっこりひょうたん島 ひよっこりひょうたん島♪



昭和39年4月6日(月)午後5時45分。NHKテレビ番組「ひよっこりひょうたん島」がスタートした日です。この番組は、5年間1224回にわたって放送されました。私も、毎日この時刻にテレビに釘付けだった記憶が今も残っています。この番組の最高視聴率は、なんと37.5%。この番組の企画・制作にあたったのが、武井博氏(当時28歳)でした。子ども番組「ひよっこりひょうたん島」や「おーい!はに丸」の制作

当時を振り返り、次のように語っていらっしやいます。私たちの仕事に相通じるものがあるとは思われませんか。

私も、自分の感覚と幼児の感覚がだいぶ離れてしまっていることを痛感した時がありました。

若いときは、自分の感覚がそのまま若い人たちと共通している部分がありますから、自分が作った番組がどのように受け取られるかある程度見当がつきます。

ところが、年齢が進むと、当然自分と子どもたちとの間にどうしようもない感覚のギャップが出てくるのです。…(中略)…

視聴者の感覚を感じ取っていかないと、視聴者との感覚のズレが広がって行って、共感を呼ぶ番組が作れなくなってしまうのです。タレントさん達はさらに大変だと思えます。昔ウケたものが今はウケない、そんな中で自分の芸を常にリフレッシュしていかなければならないのですから。テレビほど「今」の感覚を要求されるメディアはないでしょう。同時にまた、あまりにも「今」の感覚にとらわれ過ぎては、視聴者への「迎合番組」になってしまう危険性もあります。テレビ番組制作の難しさはそこにありますし、常に制作者の見識が問われるのです。

『泣くのはいやだ、笑っちゃおう～「ひょうたん島漂流記」』
武井博著 アルファブッキング 2015.12発行より

私たち教育に関わる者は、子どもをどのようにとらえ、いかに接していかなければならないのでしょうか。

- 子どもの話を最後まで聞き、受け止められる心の柔軟性
- 知識を更新し続けるための読書量
- 小さな挑戦(授業・学級経営)を続ける冒険心
- 子どもの願いを受け止め、実現する勇気と希望を与え続けられる言葉がけができる豊かな経験

子どもを否定したり、できない原因を子どもに押しついたりすることなく、絶えず自身の見識を高める努力をするのがプロ教師の姿です。「昔取った杵柄」だけに頼る教師は、完全に時代に取り残され、肝心の子どもからも置き去りにされていくばかりです。

時代は日々動き、未来を生きる子ども達に通用するものとは、「今」と「未来」をつなぐものだけです。